

令和7年度自己評価

学校法人広陵学園 広陵高等学校

1 ミッション（地域社会における自校の使命）

高い志を持ち、自らの夢や目標に向かってチャレンジする生徒を育て、地域社会・国際社会に貢献する有為な人物を育成する。

2 ビジョン（使命の追求を通じて実現しようとする自校の将来像）

1. 授業が真剣勝負の学校
2. 明るい笑顔の挨拶が交わされる学校
3. 掃除の行き届いた美しい学校
4. 部活動・学校行事・ボランティア活動に励む活力ある学校

3 目標の設定と評価

学校経営目標					
達成目標	評価指標	令和7年度			令和8年度
		目標値	実績値	評価	目標値
1 学力の定着と個に応じた進路実現に努める					
「わかる喜び」を実感させる授業展開	授業アンケートによる生徒評価 (生徒の自己評価部分の平均) * 質問項目9および10	84.0 ポイント	82.1 ポイント	3	84.0 ポイント
授業以外の学習時間の確保	「1日3時間」の実施割合	特進 50% 総進 20%	1年 26.7% 2年 28.6% 3年 59.3% 1年 4.6% 2年 3.3% 3年 11.4%	1 1 3 1 1 3	特進 70% 総進 20%
Classi を有効活用した基礎学力の向上	スタディサポート平均 GTZ (国語・数学・英語)	第2回	第2回	1	コース/学年別 第2回目目標値
		1年 D1 2年 C3 (スタサポ2回)	1年 D2 2年 C3	1	特進: 第2回 1年 B2 2年 B1 総合: 第2回 1年 D1 2年 C3
学習意欲の向上	個人面談を充実させる	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)	4 4 4	6回(1年) 6回(2年) 6回(3年)
教職員の進路における指導力の向上を目指す	大学入試問題・模試及び進路検討会議の回数	3回	3回	4	3回
個に応じた進路指導を行い進路実績を高める	合格者数・合格率の数値 (現役)	広大以上 国公立 特進コース率 修道+安田	0名 15名 32% 109名	1 2 3 4	5名 30名 50% 120名
2 基本的な生活習慣の確立を図る					
遅刻者を減らす	1日当たり遅刻者数(%)	1.0%	2.1%	1	1.5%
特別指導件数を減らす	特別指導件数	10件	80件	1	10件
転学者・退学者を減らす	転・退学者率(%)	1.0%	1.2%	2	1.0%

いじめを撲滅する	いじめの認知件数	0件	3件	2	0件
美化の徹底	取り組む姿勢	4.80	4.31	1	4.70
校内美化アンケート	ごみの分別	4.90	4.45	1	4.70
3.文武両道をめざした特別活動の活性化に努める					
学校行事の満足度を高める	アンケート満足度（肯定％）	90%	97.1%	4	90%
		90%	95.9%		90%
生徒会各委員会の活動を活発にする	委員会の開催回数	20回	26回	4	20回
部活動への参加率の向上を目指す	部活動への参加率	65%	67.9%	4	65%
中国大会・全国大会の出場を目指す	全国大会出場部数 中国大会出場部数	数値目標を設定しない	8部 10部		
4.国際理解教育の充実・深化を図る					
SEAプログラム(長期)参加者数2名を目指す	SEAプログラム(長期)参加者数	1名	1名	3	1名
SEAプログラム(中期)参加者数2名を目指す	SEAプログラム(中期)参加者数	2名	3名	4	2名
SEAプログラム(短期)参加者数15名以上を目指す	SEAプログラム(短期)参加者数	15名	5名	2	15名
英語検定試験準2級以上の合格者数(準会場受検のみ)	準2級以上合格者数 準1級合格者数→来年度は削除 2級合格者数 準2級プラス合格者数 準2級合格者数	90名 1名 15名 今年度新設 75名	87名 34% 不明 14名 22% 1名 11% 72名 40%	4	合格率 40%以上
5.保護者や地域に開かれた学校づくりに努める					
オープンスクール等の広報活動を充実させる	全体参加生徒の数 第1回 第2回 第3回 特別	1500名 500名 500名 500名	1455名 811名 中止 310名 344名 (安西・亀崎・清和262名除く)	3	1500名 500名 500名 500名
オープンスクールの内容、方法を一層充実させる	参加中学生のアンケートによる満足度	100%	99%	3	100%
ウェブサイトを効果的に活用し情報公開に努める	更新回数	150回	150回	5	—
ブログアクセス件数					月平均 1500
地域の行事への生徒の積極的参加	参加回数	15回			

4 現状分析と今後の課題

学校経営目標			
達成目標	近年の現状分析と令和8年以降の見通しと課題		
0 全般的な分析			
生徒募集と入学生について	●直近3年間の入学生		
	令和6年度	令和7年度	令和8年度

	男子（前年増減）	286 (-34)	263 (-23)	170 (-93)
	女子（前年増減）	216 (-2)	203 (-13)	148 (-55)
	計（前年増減）	502 (-36)	466 (-36)	318 (-148)
	<p>【分析】 推薦入試・一般入試ともに昨年度の受験者数を大きく下回る結果となった。要因としては複合的なものが考えられるが、夏季における本校に関する報道やそれに伴う SNS 上での様々な情報発信が、受験生や保護者の進路選択に少なからず影響を与えた可能性がある。また、こうした状況の中で、本校に対するイメージや安心感に揺らぎが生じ、一部の受験生が他校へと進路を変更したことも一因と考えられる。</p> <p>さらに、公立高校の志願倍率の低下により一般入試が相対的に易化したことも、受験動向に影響を与えたと推察される。加えて、近隣私学における教育内容や特色の充実が進んでいる中で、本校としての魅力や強みを十分に発信しきれていなかった点も否めない。</p> <p>【今後の見通しや課題】 安佐南区からの入学生の割合は昨年度の 56.2%からさらに減少しており、とりわけ従来多くの受験生を送り出していた中学校からの出願減少は重く受け止める必要がある。地域内外を問わず他校を選択する動きが見られることは、本校の教育内容や情報発信の在り方について、改めて検証すべき段階にあることを示している。</p> <p>今後は、学校としての信頼回復に向けた丁寧な情報発信とともに、教育活動全体の質の向上を図ることが不可欠である。あわせて、カリキュラムや学校行事、生活指導の在り方を含め、生徒・保護者および中学校のニーズを的確に捉えた学校づくりを進める必要がある。単一の要因に帰することなく、多面的に現状を捉え、持続的な改善に取り組んでいくことが求められる。</p>			
生徒像	<p>【分析】 国公立大学や有名私立大学を志向する生徒が一定数いる一方で、部活動や学校行事を大きな目的として入学してくる生徒も多く、本校の生徒は学力面・価値観の両面において幅広い層で構成されている。近年は、入学生の学習に対する意識や目的意識にばらつきが見られ、主体的に学習に取り組む層とそうでない層の差が広がりつつある。また、進路選択においても多様化が進んでおり、従来以上に個々の志向に応じた対応が求められる生徒像となっている。</p> <p>【今後の見通しや課題】 多様な進路希望に対応できる学校をめざす方針は今後も不変であるが、とりわけ学習面においては、国公立大学を目指せる層を確実に育成する体制の強化が求められる。今年度掲げた特進コースの強化はその中核であり、新たな体制のもとで成果を可視化していくことが重要である。一方で、本校の大多数を占める総合進学コースにおいても、基礎学力の定着と学習習慣の確立を図り、学校全体としての底上げを進めていかなければならない。特進コースが学習面で牽引し、総合進学コースがそれに刺激を受けるという好循環をいかに生み出すかが鍵となる。</p> <p>また、進路実績については一定の成果が見られるものの、これを持続的なものとするためには、低学年段階からの意識づけや学習習慣の確立が不可欠であり、組織的・計画的な取り組みの一層の充実が求められる。</p>			
進路指導と顧客満足度	<p>【分析】 進路調査（3年第3回）の質問①「広陵高校に入学して良かったか」②「進路先に満足しているか」③「あなたの進学先に保護者は満足しているか」への回答集計は以下の通り。</p> <p>①の「とても良かった」「良かった」の合計：94.8%</p> <p>②の「とても満足」「まあまあ満足」の合計：97.9%</p> <p>③の「とても満足」「まあまあ満足」の合計：96.0%</p> <p>【今後の見通しや課題】</p>			

	<p>近年大きな変化はなく、この数値からは大きな問題は読み取れない。①の質問で満足でなかった割合約5%のうち、進路に不満だと答えた生徒は2名しかいなかった。その5%メンバーを見ると生徒指導を受けていた生徒も散見され、生活面での不満がそのまま表れた形となっているのではないかと危惧している。</p>
<p>1 学力の定着と個に応じた進路実現に努める</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ●「わかる喜び」を実感させる授業展開 ●自宅学習時間の確保 ●ICT ツールの有効活用 ●学習意欲の向上 ●教職員の指導力の向上 ●大学進学希望者全員で大学入学共通テストの受験を目指す ●個に応じた進路指導を行い進路実績を高める 	<p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自宅学習時間の確保（1日3時間以上） <p>特進1年 4/15（26.7%）、2年 8/28（28.6%）、3年 19/27（70.4%） 総進1年 17/372（4.6%）、2年 12/365（3.3%）、3年 79/458（17.2%）</p> <p>上記の数値について、特進は昨年度より1、2年生は10%程度上昇しているが、3学年については20%ほど下降している。昨年度が90%超で数値的に高かっただけという可能性もあるが、特進の3年生とすればもう少し学習に打ち込んでほしいところである。前半入試を受験した特進の生徒も多かったため、その影響もあったかもしれない。1、2年生に関しては、昨年度より10%程度上昇しているものの、割合的にはまだまだ少なく、進級後の成績の伸び悩みにつながってしまう可能性がある。</p> <p>総合進学について、1、2年生は昨年度と大差ないが、3年生は多少（4%）下降している。前年度との比較はさておき、やはり自学自習の時間があまりにも少ない。ただし問題点をもっと根本的なところにある。本校のビジョンが「授業を真面目に受けること」や「基本的生活習慣の確立」といった方向性に偏っており、「自発的な学びや行動」という項目が欠けている。ということはそもそも入学生の募集の段階から、そこが足りない生徒が多数入学してきているという事実をあらわしている。もちろんそういう生徒へ合わせたビジョンも必要だが、下層のみに標準を合わせた経営計画を早く修正すべきである。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>資料は3学期の進路調査で数字は2学期休日の学習時間であるが、調査方法としてはこれでも一番数値が膨らむところのはずであるが、やはり学習時間は不足していると言える。特に特進については特進担任会とタイアップして月締めぐらいで学習時間を調査するように校長から指示が出ている。是非来年度はそのことを実行しきっていくようにしたい。</p> <p>ここの学習時間の増加が見込めないと、どうしても強制補習の方向に舵を切りたがる傾向が見られるようになるので、このことは自学自習ができる上位層を伸ばすことに大いに弊害となるので、できうる限り取りたくない手段である。</p>
<p>2 自己指導力を身につけさせる</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ●遅刻者を減らす ●特別指導件数を減らす ●転学者・退学者を減らす ●いじめを撲滅する ●美化の徹底 	<p>【分析】</p> <p>今年度は1学年6名、2学年11名、3学年4名の計21名が転退学した（R8.2現在）。人間関係や持病により全日制普通科の高等学校で学ぶことが困難であるとする事由が多い。欠席期間には学年会による保護者、生徒との繋がり維持をおこなったことで、自身の進路をしっかりと見つめ新たな目標を設定し進路変更していることは評価できる。また、転退学抑制プロジェクトや各部署の横のつながりを維持することで、昨年度よりも転退学者数を抑制できたと言える。</p> <p>遅刻者数は2月6日時点で1日あたり約30.8人、昨年度より増加傾向にある。理由としては、体調不良が多く、大体の者が午前中に登校してくる。3学年が最も遅刻の割合が高かったが、3学年の進路が決まりだした頃から遅刻の割合も増加した。</p> <p>学年、副担任の協力体制のもとで挨拶や声かけを可能な範囲で年間を通じておこなうことが効果的である。縁あって集まった集合体である学校、クラスでの人間関係を充実させ</p>

	<p>ていくことが身近なテーマや卒業後の進路に大きな影響を与える。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>多様な家庭環境や学力層の生徒を受け入れていることで、学校と保護者、生徒の連携は難しくなっている。本校における転退学者数の推移を見ると、学習不振・対人関係・生活リズムの乱れ等、要因が多岐にわたっている。今後は、学年・教科・生徒指導部との情報共有体制を強化し、早期発見・早期支援の仕組みをより精緻化する必要がある。特に、不登校傾向や無気力傾向の生徒については、面談記録等を活用し、入学直後からリスク把握を行う。また、教務部としては、学習面でのつまづきを軽減するため、補充補習のための各学年会連携も維持したい。これらの取組を通じ、学習・生活両面から生徒を支える体制を整え、転退学者の抑制につなげていく見通しである。</p>
<p>3.文武両道をめざした特別活動の活性化に努める</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ● 学校行事の満足度を高める ● 生徒会各委員会の活動を活発にする ● 部活動への参加率の向上を目指す ● 中国大会・全国大会の出場を目指す 	<p>【分析】</p> <p>◆ 広陵祭の満足度は 97.1%と高く満足度が高いことから成功であったと捉えている。不満の意見として1年生は出し物が展示であったこと、2年生では販売する食品に手が加えられないことやクラスの出し物に制約が多かったこと、3年生は屋台が忙しく他のブースを見て回る時間がないなどが挙げられていた。2年生の出し物の制約については事前に説明されていたことを聞いていなかったことによるものであり、3年生の意見についてはクラス内で解決すべき内容であると考え。</p> <p>◆ 体育祭の満足度は 95.9%と高くこちらも満足度が高かったことから成功であったと捉えている。初の総合体育館での実施であったが、体育科の綿密な計画と準備、そして当日の各役割を担った教職員と生徒らの的確な働きがあったればこそ成功であった。一部会場が遠い、出場種目数が少ない、練習と本番のルールが異なっていたなどの意見が見られた。</p> <p>◆ 委員会活動は広陵祭では文化委員、文化祭実行委員、美化委員、風紀委員、ICT委員が、体育祭では保健体育委員や体育祭実行委員が、それ以外では ICT 委員による新入生へのオリエンテーション、図書委員の朝読書放送、蔵書点検、「読書へのいざない」の原稿作成、保健体育委員の各検診の補助、美化委員の廊下、講堂、校外の清掃、風紀委員による朝の挨拶運動、会計による募金活動等があった。</p> <p>◆ 部活動加入率が昨年度より微増したのは、今年度より「特進学習部」が創部され、全学年の特進クラスの生徒が所属することが要因である。</p> <p>◆ 上位大会への出場については全国大会出場・中国大会共に常連の部が出場を果たした。特段練習環境が改善されたり、補助費が増額したりしたわけではないので、限られた状況下で指導者や生徒たちの研鑽と、外部の方や保護者のサポートの賜物であると考えている。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>◆ 学校行事については執行部との綿密な連携が必要となってくるが、本校の執行部を動かすには、教員がかなり伴走しなければならない。現状数名の部員が執行部担当の役割を担っているが、どの教員も多くの仕事を抱えた状態でありかなり厳しい。部活動、教科指導、担任業務、分掌の他業務、会議等。執行部も1つの「部」という位置づけにして、そこに顧問という形で教員を人事配置してもらえれば、多少改善されるのではないかと考える。</p> <p>◆ 委員会活動は関係分掌との連携が不可欠であるが、どの分掌も多忙で動ける教員に限りがある。関係分掌と既存の活動と共に新規の活動をするには、いかに効率よく打合せ等を行い、意思疎通を図っていくかが課題である。関係分掌が執行部の各部長と連携し、うまく動かしてもらえればと考えている。各分掌内で執行部の窓口担当がいれば円滑に進められる部分もあるのではないかと考えるので、来年度はその点の依頼もしていきたい。委員会内の連絡事項は Google Classroom や Classi などを活用して行い、委員会開催は必要最小限に留めていくことで効率よい活動に繋げていくことができるのではないかと考える。</p>

	<p>ている。</p> <p>◆部活動加入率の上昇については、生徒の関心の高い活動（e-スポーツなど）の創部が改善の一助となると考えるが、限られた活動費から初期投資、予算付け、また限られた人材での人事配置は高いハードルがある。学校から言われている「探究部」の創部については関心もあり、なおかつ指導力のある教員がいるが、創部等についてどこまで ESD が関われるのか不明である。学校側とも早急に話を進めていきたい。また、部の加入のみにとられず、校内外の様々な活動やプログラムに参加する機会が持てるように、外部の活動の案内を精査し、生徒に積極的に広報していくことも必要であると考え。</p> <p>◆中国大会・全国大会出場に向けて、ESD ができることは限られているが、円滑な活動ができるように活動費の出入金を迅速に行い、困りごとの相談を受け、必要な場合には学校側と折衝するなどサポートしていきたいと考えている。また、昨年度も書いたが、例えば推薦枠を増やす、強化部を増やし学校側が生徒会活動費以外も補助をしていく、外部指導者の招聘など学校側もサポートできることを検討していただければと考える。</p>
<p>4.国際理解教育の充実・深化を図る</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ●SEA プログラム（長期）参加者数 2 名を目指す ●SEA プログラム(中期)参加者数 2 名を目指す ●SEA プログラム(短期)参加者数 15 名以上を目指す ●イングリッシュアクティビティ参加者数 15 名を目指す ●英語検定試験準 2 級以上の合格者数 	<p>【分析】</p> <p>◆今年度は長期プログラム参加者が 1 名、中期プログラムは 3 名出た。OKC 株式会社から提示した充実したプログラムや、関心のある生徒や保護者の意向をしっかり受け止め、細やかな対応に努めていたことも、参加を決断する大きな材料となったのではないかと考えている。</p> <p>◆短期プログラムは JTB に委託している。JTB からは最小催行人数は 15 名ということで、本校の目標数値も同様の数にしている。今年度は昨年度よりさらに少なく 5 名の希望者に留まる。10 日間で 50 万円以上という金額はあまりにも高額であることから関心はあっても実際の参加には至っていないのではないかと推察される。</p> <p>◆イングリッシュアクティビティの参加者は SEA プログラム（短期）参加者は必須としているので、その 5 名と中期プログラム参加者 1 名、その他希望者 2 名、計 8 名で行った。クラスでの呼びかけをお願いしたが参加者は少ないままであった。</p> <p>◆SEA プログラムは円安が大きく影響し、参加費用が跳ね上がっていることが参加人数を抑制した大きな原因ではないかと考えている。</p> <p>◆全員受検の気運が下がったことは憂慮されるが、反面やる気のある生徒が受検しているとも取れるため、合格率が上がったのではないかと考えられる。今年度より新設された準 2 級プラスは受験者 9 名、合格者 1 名にとどまった。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>◆円安が継続する限り、全ての SEA プログラムについて参加者が大幅に加えることは考えにくい。今まで私学の奨学金があったが（一定の条件をクリアすればもらえた）、現在その基金はなくなっている。現在費用面のサポートは学校から短期は 25,000 円、長期(3 ヶ月以上)は上限 300,000 円出ているが参加を強く後押しするほどではないので、同窓会や PTA から一定金額の補助をしてもらえると違って来るのではないかと考える。</p> <p>◆評価指標と評価規準に乖離があるため、来年度はその訂正を行う。特進クラスの母数減少、検定料の高騰から受験者数の増加は見込めず、受験者数に対する合格者数の割合で評価を行う。また、1 次試験の対策講座を再開予定である。</p>
<p>5.保護者や地域に開かれた学校づくりに努める</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ●オープンスクール等の広報活動を充実させる ●ホームページを効果的に活用し、保護者や地域社 	<p>【分析】</p> <p>伴地区で行われる「伴学区ふるさと祭り」に茶道部、吹奏楽部、体操競技部がジムフレンズのメンバーとして参加。その他、地域の運動会や安佐南社協のボランティア活動などにも従事した生徒がいる。ダンス部、吹奏楽部は「様々な地域」の行事の舞台に参加して</p>

<p>会に対して、積極的かつ迅速に情報を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域の行事への生徒の積極的参加 	<p>いる。</p> <p>吹奏楽部の演奏をオープニングとし、放送部による司会・パフォーマンスを交えた部活動のユニフォーム紹介・生徒会や生徒ボランティアによる校内案内などの生徒主体のオープンスクールは毎回好評である。特に、生徒たちの主体的なボランティア参加が来場者に学校の活気や雰囲気を直接伝えることができる点が評価されており、参加後のアンケートでは「生徒の姿から学校生活のイメージが具体的に湧いた」という声が多数寄せられている。このような積極的な取り組みが、広陵高校の底堅い人気につながっていると考える。2回目は SNS 問題により中止の判断をしたが、10月のあと、すぐに特別オープンスクールとして11月に実施した。結果として、参加者は前年度とほぼ同数の参加者であった。ウェブサイトについては、知りたい情報にすぐにアクセスできることを目的にして、今年度より刷新した。年間を通して、約15,000件のアクセス数がある。</p> <p>【今後の見通しや課題】</p> <p>現在、様々な地域や団体からボランティアなどの案内が来ている。この傾向はまだまだ続くと思われるので、生徒が興味関心を持ちそうな活動や参加しやすい活動を精査し広報していこうと考えているが、ESD だけでは広報は十分とは言えないので、生徒らへの広報と共に、ものによっては Classi を通じて保護者にも案内をし、親子で話ができるように情報提供をしていくことや、担任や教科担当者からも全体、または個別で声掛けをしてもらうなどして活動に向けて後押しをしてもらうことも行っていく必要があると考える。これらの様々な活動やプログラムへの参加が生徒の進路決定の一助になっていくので、早期からどれだけ実際に移せるのかが課題であると考えている。また、参加目標数値の設定について ESD としては不要と考えている。ただ、どのような活動に参加したかについては把握できる限り行っていこうと考えている。</p> <p>生徒主体の運営を強化し、体験型企画等の充実や SNS・動画を活用した広報を強化することが重要である。さらに、中学生や保護者にきめ細かく丁寧な対応をするため、個別の説明会の活用も有効である。一方で、生徒の負担を適切に調整し、部活動紹介の多様化や来場者ごとの関心に応じたプログラム提供など、満足度向上の工夫が課題となります。生徒の主体性を生かしつつ、新たな企画や広報戦略を取り入れることが必要であると考えている。</p>
--	--